

ルツ記・サムエル記上 通 読

7 月



(7 月 30 日)「サムエル記上 9 : 1～10」

彼には名をサウルという息子があつた。美しい若者で、彼の美しさに及ぶ者はイスラエルにはだれもいなかった。民のだれよりも肩から上の分だけ背が高かつた。

(サムエル記上 9 章 2 節)

- ・イスラエルの人々はサムエルに、王を求めました。そして主はサムエルに、「彼らの声に従い、彼らに王を立てなさい」と言います。9 章に入り、一人の人物が登場します。彼の名前はサウルです。
- ・サウルはキシシュというベニヤミン族の男の息子でした。ある日、キシシュのろばが数頭行方不明になります。キシシュはサウルに、ろばを捜してくるよう命じますが、サウルは見つけ出すことができませんでした。
- ・そのときにサウルの供の若者が、当時先見者と呼ばれていた預言者の元に行つて、どうしたらよいかを聞こうと提案します。若者サウルと先見者サムエルとの出会いが、ここに設定されるのです。

(7 月 31 日)「サムエル記上 9 : 11～20」

サムエルがサウルに会つと、主は彼に告げられた。「わたしがあなたに言ったのはこの男のことだ。この男がわたしの民を支配する。」

(サムエル記上 9 章 17 節)

- ・サムエルは先見者として、聖なる高台で民のためにいけにえをささげていました。二人の息子はどうなってしまったのだろうか？という思いもあります。サウルは近くにいた娘に聞いて、高台に上ろうとします。
- ・そのとき、サムエルもそこにやって来ました。サムエルの耳には、一人の男をベニヤミンの地から遣わすということが主から告げられていました。さらにサウルに出会ったとき、「わたしがあなたに言ったのはこの男のことだ」と主は告げられます。
- ・サウルは背が高く、美しい若者でした。その彼を、主は選んだのです。サムエルは全イスラエルの期待があなたにかかっているとサウルに告げます。ろばを捜しに來ただけなのになあ、とサウルは思っていたかもしれませんが。

(7 月 1 日)「ルツ記 3 : 1～7」

ボアズは食事をし、飲み終わると心地よくなって、山と積まれた麦束の端に身を横たえた。ルツは忍び寄り、彼の衣の裾で身を覆つて横になった。

(ルツ記 3 章 7 節)

- ・ルツはボアズの畑で落ち穂を拾いながら、ナオミと共に生活をしていました。地主であるボアズに目を掛けられ、不自由なく過ごしていたようです。しかしナオミはさらなる「ルツが幸せになる落ち着き先」を探していました。
- ・ナオミがルツに命じたのは、ボアズが寝ている場所に忍び込みなさいということです。男性が女性の寝室に行くことを、俗な言い方で夜這いと言います。ナオミは大切な嫁に、そのようなことをさせようとしたのでしょうか。
- ・ナオミはきっと、ボアズの誠実な人となりをよく知っていたのだと思います。ルツがきちんと誠意を見せたら、絶対に手荒なことはしないという確信があつたのでしょう。またボアズがルツに好意を示していることにも気づいていたのかもしれませんが。

(7月 2日)「ルツ記3:8~13」

夜半になってボアズは寒気がし、手探りで覆いを搜した。見ると、一人の女が足もとに寝ていた。

(ルツ記3章8節)

- ・食事をし、飲み物(多分ぶどう酒)を飲んだボアズは、横になってぐっすり休みます。彼はルツがこっそり横に寝たことに、まったく気づきませんでした。しかし夜半、寒気を感じてボアズは目を覚まします。
- ・驚くべきことに、彼の足元には知らない女性がいました。しかしボアズは誠実な人物でした。ルツが自分のそばで寝ていることを咎めもせず、またルツを襲うこともなく、温厚にこれからのことを伝えます。
- ・さてナオミにはエリメレクという夫がおり、彼は土地を与えられていました。エリメレクが亡くなったあと二人の息子に相続されましたが、その息子も子がないまま死んでしまいました。その土地が今、宙に浮いたままです。それを親戚は何かしないといけません。

(7月 3日)「ルツ記3:14~18」

ナオミは言った。「わたしの娘よ、成り行きがはっきりするまでじっとしていなさい。あの人は、今日中に決着がつかなければ、落ち着かないでしょう。」

(ルツ記3章18節)

- ・昨日の箇所で書きましたが、ユダヤにはそれぞれの家の土地を守るために、男性が亡くなりその相続人がいない場合には、関係の深い人(親戚など)がその土地を買い戻さなければいけないという決まりがありました。
- ・ボアズはナオミの親戚です。しかしナオミには、ボアズ以上に近い関係の親戚もいたようです。ボアズはそのことを知っていました。きっとルツのことを目にかけている中で、詳しく調べていたのでしょう。
- ・ボアズはルツに大麦を6杯持ち帰らせます。それも真っ暗なうちに、誰にも見られないように配慮します。ボアズにはすでに、ルツの真心を受け止める覚悟があったのでしょう。それからの展開は...、明日のお楽しみです。

(7月 28日)「サムエル記上8:10~18」

その日あなたたちは、自分が選んだ王のゆえに、泣き叫ぶ。しかし、主はその日、あなたたちに答えてはくださらない。」

(サムエル記上8章18節)

- ・昨日の箇所で主がサムエルに告げた返事は、「今は彼らの声に従いなさい」というものでした。そしてサムエルに、「王制とはなにか」ということを、きちんと民に伝えるように言います。
- ・サムエルが語った王の権能は、厳しいものでした。息子や娘が徴用されること、また最上の畑などが没収され、穀物や羊も徴収されることなどを伝えます。王を立てるということは、王の奴隷になるということだということです。
- ・神さまからいただいたものを喜んでお返しするのと、子どもや収穫などを強制的に王に徴用されるのでは、随分違います。しかしイスラエルの人々は、それでも王を立てて欲しいと願うのです。

(7月 29日)「サムエル記上8:19~22」

主はサムエルに言われた。「彼らの声に従い、彼らに王を立てなさい。」サムエルはイスラエルの人々に言った。「それぞれ、自分の町に帰りなさい。」

(サムエル記上8章22節)

- ・神さまはサムエルに、イスラエルの人々の声通りに王を立てるように告げます。それまでイスラエルには、王はいませんでした。そのことはイスラエルの人々にとって不満だったようです。
- ・サムエルが脅したにもかかわらず、イスラエルの人々はその声に従おうとはしませんでした。当時、近隣諸国には王がいました。その統治の様子はイスラエルの人たちにとって、うらやましく見えたのでしょう。
- ・「隣の畑は青く見える」と言います。神さまの声は直接聞くことができませんが、王様の姿は見ることはできます。「見えないものではなく見えるものに頼ってしまう」、そのような思いは、わたしたちもよく分かるかもしれません。

(7月 26日)「サムエル記上 7:9～17」

サムエルは石を一つ取ってミツパとシェンの間に置き、「今まで、主は我々を助けてくださった」と言って、それをエベン・エゼル(助けの石)と名付けた。
(サムエル記上 7章 12節)

・サムエルはイスラエルのために焼き尽くす献げ物をささげ、イスラエルのために主に助けを求めて叫びました。預言者とは神さまの言葉を預かるとともに、民のために神さまにとりなしをする人です。

・ペリシテ軍はイスラエルに戦いを挑みますが、神さまが激しい雷鳴によってイスラエルを助けたために、打ち負かされてしまいます。そこでサムエルは、「今まで、主は我々を助けてくださった」と言い、石をミツパとシェンの間に置きました。

・この出来事は敵が現れても、神さまがやつつけてくださるという意味ではありません。それよりも「神さまを慕い求める」ことがどれだけ大切なのか、思い返しなさいということなのです。

(7月 27日)「サムエル記上 8:1～9」

裁きを行う王を与えよとの彼らの言い分は、サムエルの目には悪と映った。
そこでサムエルは主に祈った。
(サムエル記上 8章 6節)

・8章になって、急にサムエルは年老います。それまでの期間、特に聖書に書くほどの大きな出来事はなかったのでしょうか。そしてサムエルは、息子たちをイスラエルのために裁く者として任命します。

・しかしその二人の息子ヨエルとアビヤは、不正な利益を求め、賄賂を取って裁きを曲げていたようです。サムエルが子どものときに仕えていたエリの子どもたちも、同じように墮落していました。神殿に仕える人には、誘惑が多いのでしょうか。

・イスラエルの長老は、サムエルに申し入れます。サムエルの息子たちが父の道を歩まないの、自分たちのために王を立てて欲しいというのです。これまでイスラエルは主を王として崇めていました。そのためサムエルはこの願いの是非を聞くため、主に祈るのです。

(7月 4日)「ルツ記 4:1～6」

ボアズは町の長老のうちから十人を選び、ここに座ってくださいと頼んだので、彼らも座った。

(ルツ記 4章 2節)

・町の門にボアズが座っていたとき、当の親戚の人が通りかかります。そこでボアズは交渉を始めます。町の門は当時の社交場であり、また人々が多く行き交うことから重要な決定がなされる場でもありました。

・ボアズはまず、ナオミが亡き夫エリメレクの所有する土地を手放そうとしているので、それを買い戻してくれないかと持ち掛けます。このときはまだ、ルツのことは告げていませんでした。

・その時点で親戚の人は、「責任を果たしましょう」と答えます。しかしボアズはそこで、「それならルツも引き取るように」と伝えます。その目的は故人の名を再興することですが、親せきの人は「そこまではできない」と答えます。ボアズの思い通りに事が進みます。

(7月 5日)「ルツ記 4:7～10」

その親戚の人は、「どうぞあなたがその人をお引き取りください」とボアズに言って、履物を脱いだ。

(ルツ記 4章 8節)

・わたしたちに知らない親戚がいて、突然その財産を相続することになったとします。一等地に広い土地があり、その権利はあなたのものですよと言われたら、「ラッキー！」とすぐにハンコを押すかもしれません。

・しかし、「その代わりそこに住んでいる人の面倒をみてくださいね」と言われたら、躊躇するでしょう。この親戚の人は、そのような状態だったのかもしれませんが。彼はイスラエルのやり方で、その権利をボアズに譲渡します。

・その場には、10人の長老が証人として立ち会っていました。このことによってボアズはきちんとした形で、ルツを迎え入れることができました。ドロドロとした内容が多い旧約聖書ですが、このルツ記は清々しいハッピーエンドと言えるのかもしれません。

(7月 6日)「ルツ記4:11~17」

ボアズはこうしてルツをめとったので、ルツはボアズの妻となり、ボアズは彼女のところにいった。主が身ごもらせたので、ルツは男の子を産んだ。

(ルツ記4章13節)

- ・昨日の10節には「モアブの婦人ルツ」という言葉が載っていました。しかしボアズはルツが異邦人であることなど何も気にせずに、ルツをめとります。このことは、神さまのみ心にかなったことだったようです。
- ・今日の箇所(ルツ記)の聖書の小見出しは、「人々の祝福と神の祝福」となっています。二人の結婚は、人からも神さまからも祝福されたものでした。人々はラケルやレアといった女性たちの名を持ち出し、ボアズとルツもそのようになるようにと願います。
- ・そしてボアズとルツの元には、男の子が与えられます。ナオミは夫を亡くし、二人の息子に先立たれました。彼女は自分のことをナオミ(快い)ではなくマラ(苦い)と呼ぶようにとまで言っていました。しかしここで、神さまが彼女を顧みられたのです。

(7月 7日)「ルツ記4:18~22」

オベドにはエッサイが生まれ、エッサイにはダビデが生まれた。

(ルツ記4章22節)

- ・ルツ記の最後は、系図で締めくくられます。マタイ福音書1章の系図と見比べてみましょう。「ユダはタマルによってペレツとゼラを、ペレツはヘツロンを、(マタイ1:3)」とあるように、ボアズの祖先ペレツはユダとタマルの子でした。(創世記38章参照)
- ・「サルモンはラハブによってボアズを、ボアズはルツによってオベドを、オベドはエッサイを、エッサイはダビデ王をもうけた。(マタイ1:5~6)」。サルマとサルモンは同一人物です。このようにルツは、エッサイのおばあちゃん、ダビデのひいおばあちゃんなのです。
- ・そしてマタイ福音書の系図の先には、イエス様が登場します。つまりこのボアズとルツの出会いがなければ、系図はイエス様まで行きつかなかったのかもしれない。異邦人であるルツが救い主の系図に登場する。それが神さまの大きな計画なのです。

(7月 24日)「サムエル記上6:17~21」

彼らはキルヤト・エアリムの住民に使者を送って言った。「ペリシテ人が主の箱を返してきました。下って来て、主の箱をあなたがたのもとに担ぎ上ってください。」

(サムエル記上6章21節)

- ・「この中のはのぞいてはいけません」と書かれた場所があると、わたしはどうしてものはのぞいてしまいたくなります。ホラー映画などではダメだと言われているものをのはのぞいてしまったがために、恐ろしい出来事に巻き込まれるなんてこともあります。
- ・せっかくの喜びにあふれたベト・シェメシュの人たちに、恐れが生じます。主の箱をのはのぞいてしまったからです。70人の人が、そのことによって打たれてしまいました。怒りっぽい神さまです。
- ・こうなると、主の箱は恐ろしい物になってしまいます。そしてベト・シェメシュの人々は、その箱を持って行って欲しいとキルヤト・エアリムの人たちに言います。何だか神さまが厄介者として扱われているようで、少し悲しいです。

(7月 25日)「サムエル記上7:1~8」

サムエルは命じた。「イスラエルを全員、ミツパに集めなさい。あなたたちのために主に祈ろう。」

(サムエル記上7章5節)

- ・主の箱(5章までは神の箱)がイスラエルの元に戻ってきました。キリアト・エアリムの人々は主の箱をアビナダブの家に運び入れ、アビナダブの息子エルアザルに守らせることにします。そのときにエルアザルは、聖別されました。
- ・それから20年の時がたちます。その期間の出来事は、聖書には記されていません。ただ3節の記述を見ると、イスラエルの人々は異教の神々にも仕えていたようです。そこで登場したのがサムエルです。
- ・少年の頃から20年がたち、サムエルは立派な青年になっていたことでしょう。サムエルは預言者として、イスラエルの民を導きます。このとき彼は異教の神々を取り除くように民に伝え、主に助けを求めていきます。

(7月 22日)「サムエル記上 6:1~9」

主の箱を車に載せ、賠償の献げ物として主に返す金の品物を箱に入れ、傍らに置きなさい。それを送り出し、行くがままにきなさい。

(サムエル記上 6 章 8 節)

・主の箱を返すことにしたのはいいものの、どうやって返したらいいのだろうか。ペリシテの人たちはそれを祭司と占い師たちに尋ねます。すると返ってきた答えは、「賠償の献げ物をきちんとしなさい」というものでした。

・ちゃんとお詫びをきなさいということなのでしょう。ペリシテの領主の数に合わせて、5つの金のはれ物と5つの金のねずみを献げ物として持つて行くことになりました、はれ物には「疫病を送り返す」という意味があり、ねずみは大地を荒らす動物の象徴です。

・さらに車を引くのは、まだ軛をつけたことのない雌牛です。その牛はまだ子牛に乳を飲ませていましたが、それを引き離して行かせるのです。神さまの導きがなかったならば雌牛は一步も進まない、そのような状況を作り上げたのです。

(7月 23日)「サムエル記上 6:10~16」

雌牛は、ベト・シェメシュに通じる一筋の広い道をまっすぐに進んで行った。歩きながら鳴いたが、右にも左にもそれなかった。ペリシテの領主たちは、ベト・シェメシュの国境まで後をつけて行った。(サムエル記上 6 章 12 節)

・主の箱を乗せた車は、右にも左にもそれることなく進んで行きました。まさに「帰還」という言葉がよく似合います。車はベト・シェメシュまで進んで行き、ヨシュアの畑で止まりました。

・「主の箱が奪われた!」という悲しい知らせは、ベト・シェメシュの人々の耳にまで届いていたのでしょう。主の箱が戻って来るのを見て、人々は喜びます。そして人々はいけにえを主にささげます。

・ペリシテの領主たちは主の箱が無事にベト・シェメシュの人たちの元に戻り、そこでいけにえがささげられたのを見届け、自分たちの領地に戻ります。ところで5章までは「神の箱」と書かれていたのに、どうして6章以降は「主の箱」になっているのでしょうか。 12

(7月 8日)「サムエル記上 1:1~11」

彼女を敵と見るペニナは、主が子供をお授けにならないことでハンナを思い悩ませ、苦しめた。

(サムエル記上 1 章 6 節)

・今日からサムエル記に入ります。およそ半年に渡って、イスラエル王国の中心であるダビデ王を含む様々な人物が登場します。最初に出てくるのは、ハンナという女性です。彼女には子どもがいませんでした。

・聖書では子どもができないことは、神さまの祝福がないことだと考えられていました。ハンナの夫エルカナにはもう一人ペニナという妻がおり、ペニナには子どもがいました。そのためペニナはハンナを苦しめていたようです。

・ハンナは神さまに祈ります。「男の子をお授けくださいますなら、その子の一生を主におささげし、その子の頭には決してかみそりを当てません」という彼女の誓いは、その子をナジル人として神さまにお委ねするということです。その願いは聞かれるのでしょうか。

(7月 9日)「サムエル記上 1:12~20」

ハンナは身ごもり、月が満ちて男の子を産んだ。主に願って得た子供なので、その名をサムエル(その名は神)と名付けた。

(サムエル記上 1 章 20 節)

・ハンナが神殿で祈っている様子を、祭司エリが見ていました。あまりに長くハンナが祈っているため、エリはハンナが酒に酔っているのだと勘違いします。礼拝堂で一生懸命祈っているときに牧師から、「酔いをさまして出直しなさい」と言われるとショックですが。

・ハンナはなぜここで祈っているのか、その悩みをエリに打ち明けます。エリが「安心して帰りなさい。イスラエルの神が、あなたの乞い願うことをかなえてくださるように」と伝えたことで、ハンナの悩みは晴れたようです。

・そしてハンナはエルカナによって身ごもり、男の子を産みます。その子は聖書の書名にもなっている「サムエル」と名付けられます。そのサムエルとは、「その名は神」という意味があるそうです。

(7月 10日)「サムエル記上 1:21~28」

ハンナは言った。「祭司様、あなたは生きておられます。わたしは、ここであなただけに立って主に祈っていたあの女です。(サムエル記上 1 章 26 節)

- ・ハンナは神殿で祈り、神さまはその祈りに応えてサムエルを与えました。祈りが聞かれたときに、わたしたちはどうすべきでしょうか。祈りのことを忘れて、自分の努力でそのことが実現したと思ってしまうことはないでしょうか。
- ・ハンナは誓いを忘れていませんでした。子どもが乳離れするまでは自分の元で育てますが、その後、シロの主の家に上っていきます。多くのいけにえを携えて、彼女は主を礼拝するために行くのです。
- ・祈りが聞かれたときに、神さまに感謝をささげて礼拝する。このことは、わたしたちにとっても大切なことです。ハンナはエリと再会しますが、そのときに神さまを大いに賛美したことでしょう。その祈りを、明日読んでいきましょう。

(7月 11日)「サムエル記上 2:1~11」

食べ飽きている者はパンのために雇われ 飢えている者は再び飢えることがない。子のない女は七人の子を産み 多くの子をもつ女は衰える。

(サムエル記上 2 章 5 節)

- ・ハンナには神さまの憐れみによって、幼子サムエルが与えられました。子どもがないことによって虐げられていた闇の日々が、神さまのみ手によって開かれたのです。彼女は歌わずにはおれませんでした。
- ・ところがこの歌の内容をよく見ると、勇士や食べ飽きているものが弱くされると歌われています。これらのことは直接ハンナには関係のないことのように思えます。そしてこの歌は、イスラエルに大切なものとして引きつがれていました。
- ・イスラエルの人々が救いに向けて開かれるきっかけとして、彼らはサムエルの誕生を捉えたのです。そしてその思いはイエス様誕生のときまで受け継がれ、「マリアの賛歌 (ルカ 1:46~55)」にも影響を与えたのです。

(7月 20日)「サムエル記上 4:18~22」

エリの嫁に当たる、ピネハスの妻は出産間近の身であったが、神の箱が奪われ、しゅうとも夫も死んだとの知らせを聞くと、陣痛に襲われてかがみ込み、子を産んだ。
(サムエル記上 4 章 19 節)

- ・エリは二人の息子ホフニとピネハスが死んだことを聞きます。そしてさらに、神の箱がペリシテ軍に奪われたことを耳にします。神の箱の話を知ったときに、エリはあおむけに倒れ、自分の席から落ちて首を折って死んでしまいました。
- ・エリは祭司として、神殿に仕えてきました。大切な神の箱が奪われたことを、受け入れることができなかったのでしょうか。エリは死にましたが、息子ピネハスの妻がちょうど出産間近でした。
- ・彼女は男の子を産み、名前をイカボドと名付けます。その意味は、栄光は失われたというものです。神の箱が奪われたということは、栄光がイスラエルを去ったことを意味します。それほど大変なことだったのですが、そのときサムエルは何をしていたのでしょうか。

(7月 21日)「サムエル記上 5:1~12」

主の御手はアシュドドの人々の上に重くのしかかり、災害をもたらした。主はアシュドドとその周辺の人々を打って、はれ物を生じさせられた。

(サムエル記上 5 章 6 節)

- ・神の箱は奪われ、イスラエルからペリシテ人の手に渡りました。ペリシテの人たちは神の箱を、アシュドドにあるダゴンの神殿に運び入れます。ダゴンはペリシテ人の神で、神殿にはその像が置かれていました。
- ・しかし神の箱が運び込まれた次の朝、ダゴンがうつぶせに倒れているのを見ます。さらに翌朝には、ダゴンの頭と両手は切り取られていました。まさしくイスラエルの神の前に、「手も足も出ない」状態です。
- ・さらに人々ははれ物（疫病）に悩まされます。そのため神の箱をガトに移しますが、そこでもはれ物は人々を襲います。さらにエクロンでも死の恐怖に人々が包まれたため、人々は神の箱をイスラエルに送り返そうとします。とんでもないものを奪ってしまったのです。

(7月 18日)「サムエル記上 4:1~9」

大変なことになった。あの強力な神の手から我々を救える者があろうか。あの神は荒れ野でさまざまな災いを与えてエジプトを撃った神だ。

(サムエル記上 4 章 8 節)

・3章で主はサムエルに、エリの息子たちの罪を裁くと伝えられました。それからサムエルは成長し、全イスラエルに主の言葉を伝える立場になったようです。いわゆる「預言者」として遣わされたということです。

・あるときイスラエルは、ペリシテに向かって出撃しました。その出撃がサムエルの命令だったのか、また主のみ心だったのかはわかりません。ただイスラエル軍はペリシテ軍に打ち負かされてしまったようです。

・そこでイスラエルの長老たちは、主の契約の箱をシロから戦場に運んでくることを提案します。契約の箱は出エジプトの時に神さまから与えられた十戒の石板が収められていました。荒れ野でもイスラエルの民を守った大切なものです。それが戦場に持ってこられたのです。

(7月 19日)「サムエル記上 4:10~17」

神の箱は奪われ、エリの二人の息子ホフニとピネハスは死んだ。

(サムエル記上 4 章 11 節)

・主の契約の箱が戦場に持ってこられたことで、イスラエルの全軍は喜びの声をあげます。しかしその声を聞いて、ペリシテ軍は逆に燃え上がります。「窮鼠猫を噛む」ということわざがありますが、人は追い詰められたらとんでもない力を出すことがあります。

・ペリシテ軍はイスラエル軍を打ち負かしました。歩兵 30,000 人が倒れ、エリの二人の息子ホフニとピネハスも死んでしまいます。そして大切な主の契約の箱までも、ペリシテ人に奪われてしまうのです。

・2章 34 節に書かれた主の言葉、「あなたの二人の息子ホフニとピネハスの身に起こることが、あなたにとってそのしるしとなる。二人は同じ日に死ぬ」が成就したのです。98 歳で目が見えなくなっていたエリは、二人の息子が死んだ報告を聞きます。

(7月 12日)「サムエル記上 2:12~21」

この下働きたちの罪は主に対する甚だ大きな罪であった。この人々が主への供え物を軽んじたからである。

(サムエル記上 2 章 17 節)

・旧約聖書のレビ記には、供え物のやり方が詳しく書かれています。その中に、「焼き尽くす献げ物」というものがあります。その供え物は文字通り、完全に焼き尽くして煙にしなければいけません。

・また、「脂肪はすべて主のものである。脂肪と血は決して食べてはならない(レビ記 3:16~17)」とも定められています。しかし脂肪を燃やして煙にする前に、祭司のための肉を寄こすように命じた人がいます。霜降りが美味しいことを知っていたのでしょうか。

・これらの「主に対する甚だ大きな罪」を命じたのは、エリの二人の息子でした。彼らは祭司でしたが、神さまの目に悪とされることを、平気でおこなっていたのです。宗教者の墮落です。残念ながらいつの時代にも見られることです。

(7月 13日)「サムエル記上 2:22~26」

人が人に罪を犯しても、神が間に立ってくださる。だが、人が主に罪を犯したら、誰が執り成してくれよう。」しかし、彼らは父の声に耳を貸そうとしなかった。主は彼らの命を絶とうとしておられた。(サムエル記上 2 章 25 節)

・エリはすでに、非常に年老いていました。現場からも遠のいていたのでしょう。しかしそのエリの耳に、よくないうわさが入ってきます。そのようなうわさは事実ではないことも多いのですが、今回はそうではありませんでした。

・昨日の箇所にあったように神さまへの供え物に手を付けただけではなく、臨在の幕屋の入り口で仕えている女性と良くないこともしていたのです。さすがにエリは、二人の息子を諭します。

・ここで二人の息子が回心したらいいのですが、そうはならないのが聖書の物語です。彼らは父エリの言葉に耳を貸しません。一方サムエルは、主にも人々にも喜ばれる子として育ちます。対照的です。

(7月 14日)「サムエル記上 2:27~36」

あなたの二人の息子ホフニとピネハスの身に起こることが、あなたにとってそのしるしとなる。二人は同じ日に死ぬ。

(サムエル記上 2 章 34 節)

- ・エリの元に、神の人があらわれました。神の人とは御使いや天使、メッセンジャーのような存在でしょうか。その神の人は、エリにとってうれしいことではなく、良くないことを伝えに来ました。
- ・なぜ神の人は二人の息子ではなく、父エリに伝えたのでしょうか。子の不祥事は親の責任だということでしょうか。すでにエリは息子たちがしていることについて知っていました。それを改めて聞かされたわけです。
- ・神の人は、二人の息子ホフニとピネハスが同じ日に死ぬということをエリに伝えます。そのことは、エリの心にどのような思いを抱かせたのでしょうか。何とかならないものかと、祈ったかもしれません。

(7月 15日)「サムエル記上 3:1~9」

主は再びサムエルを呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとに行き、「お呼びになったので参りました」と言った。エリは、「わたしは呼んでいない。わが子よ、戻っておやすみ」と言った。

(サムエル記上 3 章 6 節)

- ・「サムエルや、サムエルや」、タッタッタ、トントントン、「はい、エリさん、お呼びでしょうか」、「いや、わたしは呼んでいないよ。お休み」。このようなやり取りが三回繰り返されるこの物語は、幼稚園の礼拝でもよく語られます。
- ・祭司エリの二人の息子ホフニとピネハスも祭司でしたが、彼らは神さまの目に悪とされることをしていました。そのためこの時代、主の言葉が臨むことは少なく、幻が示されることもまれだったそうです。
- ・その中で、神さまはサムエルに語り掛けようとしているのです。「主よ、お話しください。僕（しもべ）は聞いております」と祈る少年サムエルの絵画を見ながら、わたしたちも神さまの声を待ちましょう。

(7月 16日)「サムエル記上 3:10~14」

主はサムエルに言われた。「見よ、わたしは、イスラエルに一つのことを行う。それを聞く者は皆、両耳が鳴るだろう。」 (サムエル記上 3 章 11 節)

- ・主に 3 回呼ばれたものの、エリから呼ばれたと思って彼の元に行ったサムエル。エリはその様子を見て、主が呼ばれたと気づきます。そこでエリはサムエルに、次呼ばれたら「お話しください。僕（しもべ）は聞いております」と答えるように伝えます。
- ・神さまがサムエルに伝えたのは、エリの家に対することでした。2 章 27~36 節では、神の人がエリに二人の息子が死ぬことを伝えていました。そのことをサムエルにも同じように伝えるのです。
- ・このときのサムエルの心のうちは、どうだったのでしょうか。小さいころからお世話になっているエリ。父親のように愛情を注いでもらったことでしょう。そのエリの家が裁きを受ける。このことを聞いて、さてサムエルはどうするのでしょうか。

(7月 17日)「サムエル記上 3:15~21」

サムエルは成長していった。主は彼と共におられ、その言葉は一つたりとも地に落ちることはなかった。

(サムエル記上 3 章 19 節)

- ・朝起きて、サムエルは夜に主に告げられたことをエリに伝えるのを恐れました。それはそうだと思います。「あなたの家が、とこしえに裁かれますよ！」などと言ってしまうと、「お前は今日から晩御飯抜き！」となりかねませんから。
- ・しかしサムエルに対して、エリにすでに同じ内容を告げていたことを主は伝えていました。だからサムエルは特に躊躇する必要もなかったわけです。ただなぜ、主は自分に言ったのだろうとは思ったでしょう。
- ・サムエルは隠し立てせず、主に告げられたことをエリに伝えます。そしてエリは、それを受け入れます。その後は特に大きな事件もなく、サムエルは成長していきました。主はサムエルと共にいたということです。